

# 日本大学社会学会創立 100 周年記念大会 『社会学論叢第 200 号』 記念号によせて

日本大学社会学会会長 仲川 秀樹

日本大学社会学会は、学会基盤である日本大学社会学科が1920年4月に創設された直後の6月に、公開講演会が催され、それが学会活動の第1歩となる。東京大学に続き、私学では、東の日本大学、西の関西学院大学が社会学科を創設し、日本の社会学界の草分け的存在になった。そして、2020年に日本大学社会学科創設100周年、日本大学社会学会創立100周年を迎えることになった。同年12月12日(土)、本学会創立100周年記念大会が開催され、記念大会シンポジウムの内容は、本号の特集論文となっている。同時に、本学会学術研究雑誌である『社会学論叢』は第200号を迎え、社会学世界における学術的な軌跡を記すこととなった。

日本大学社会学会の学術的記録である『社会学論叢』において印象深いのは、1957年4月発刊の第7号「オーギュスト・コント記念号」冒頭、コントの肖像画が用いられ、さらに9月発行の第9号冒頭には、コントが愛したクロチルド・ド・ヴォー夫人の肖像画が掲載されている。社会学の祖、オーギュスト・コントの肖像が使用されることは他の文献でも多いが、クロチルド・ド・ヴォー夫人の肖像画も併せて紹介されたことに、当時の本学会誌の果たした重みを考えた。両肖像画やコント関係の文献・資料などは、社会学科所属教員が自ら現地を歩き、入手したものである。そこには日本大学社会学会における「社会学史」の伝統と、「実証研究」の基盤が、垣間みられることも併せてふれておきたい。

本学会の歴史的な事実として、『社会学論叢創刊第1号』における馬場明男博士の発刊のことばに、「これは小さい世論に過ぎないが、少なくとも正しい世論である。私はその世論の蔭にかくされている将来への期待にそむくことなく学界の指導勢力たるべく今後とも全エネルギーを打ち込みたいと思う」とある。これは小さな共同体の研究成果が社会学界の基盤を支える役割を果たすため、公的機関誌の必要性に応えたものと解釈したい。

日本大学社会学会が、日本大学社会学科の機関誌から外へと向けられた

のは、2000年代初頭、日本学術会議学術研究団体に登録されたことにある。一大学の学内学会の枠を超え、全国学術研究団体のメンバーとして対外的な研究活動を広げるようになった。学術研究団体の申請にあたっては、毎年度の学会大会・研究例会・学術講演会の開催、学会機関誌の定期発行、さらに学会理事・会員などの構成メンバーの同一大学への偏りなき組織形成を実施した。多くの制約を乗り越えての学術研究団体認可となった。その認可の過程では本学会規約改正など、数年をかけての作業となった。小さい世論でも、大きな学術団体に名を連ねたのである。日本大学社会学会という組織、その存在がアカデミズムの象徴にもなっている。

本学会の基盤である日本大学社会学科創設100周年の流れが一つの大学に限定された組織ではないことを示すのは、社会学科と日本大学社会学会の活動に証明されている。

日本大学社会学会が創立されて、その学会機関誌の編集内容からも明らかである。先ほど紹介したオーギュスト・コント特集号に続き、第8号ではコント研究の先駆者でもあった浅野研真氏による「オーギュスト・コント研究文献」、第9号では斉藤正二博士の「オーギュスト・コントと経済社会学」、「オーギュスト・コント著作目録」など一連のコント特集が続き、社会学を日本の研究者のみならず学生に知らしめる基盤を構築したのはいうまでもない。

また、第13号における「デュルケーム＝ジンメル生誕100年記念号」での、馬場博士の指摘が興味深い。「日本大学社会学科はアメリカ社会学だけを研究しようという傾向が強い。だからといって雰囲気はアメリカ的偏向を強く示しているわけではない。アメリカ社会学とヨーロッパ社会学との密接な関係を説くことを決して忘れないのである。」とある。それが本号での銅直勇教授の「デュルケームの社会学」、杉山栄教授の「ゲオルグ・ジンメルの小伝とその社会学説」そして斉藤博士の「ジンメル社会学のわが国に及ぼした影響」の各論文にものがたられている。

さらに『社会学論叢』は、社会思想との関連にも注目する。第25号で「J.J. ルソー生誕250年記念特集号」の編集を組み、1962年6月のルソーの生誕250年に併せての発刊になった。馬場博士の論説は、社会学史研究においてルソーは等閑視されていたことに触れ、社会学の起源の問題を追求するに当たって、近代の自然法思想が社会学の発端と密接なつながりがあることをあらゆる機会に強調していた新明正道博士の立場を紹介した。新

明博士もルソーの理論が社会学の学問的形成に貢献したことを示したことで、社会学とルソーの関係を身近なものとなった。本号で斉藤博士は、ルソーの日本社会科学思想に及ぼした影響を論じ、日本社会学でのルソー研究史にも触れられた。

そして、『社会学論叢』の存在を決定づけたのは第30号での「M. Weber 生誕100年記念号」ではないかと考える。1864年4月から生誕100年となる1964年11月発行の記念号には、斉藤博士の「マックス・ウェーバー評伝」と題する論稿が掲載された。当時の学界では、ウェーバー生誕100年を記念するシンポジウムや学術関係の著書が多く出版されていた。当然、日本大学社会学会でも構成メンバーによる記念号の発刊は責務であった。それに本学会のみで特集論文の編集が可能なことは社会学史・学説研究の伝統が備わっていることの証であるし、社会学を学ぶ社会学科の学生にウェーバーの存在を身近なものとし、より研究に触れる環境を提供したことにはほかならない。

日本大学社会学会100年の歩みは『社会学論叢』と共にある。日本大学社会学会の研究・教育は、『社会学論叢』に記録として残されている。100年の軌跡のなかで、社会学史・社会学説史を伝統にしながらも、欧米の研究資料を当地に出向き検証したこと。日本国内での実証研究、教員・学生との調査実習などの成果も、その後の『社会学論叢』特集号にみることができよう。現代では、社会学の研究領域の細分化によって、研究テーマだけでは内容を把握するのも困難な状況にもなっている。社会学者の専門領域も分化している。まさに社会のファッド化は、学問世界でも顕著になり複雑な社会問題を解決するために社会学の役割はより重要になっている。「社会学は社会で役に立つのか」それを実践するためにも、日本大学社会学会創立100周年の軌跡と、『社会学論叢第200号』までの記録を基盤に、あらたな日本大学社会学会101年に向けてのさらなる進化をめざしたい。

ここに、日本大学社会学会創立100周年（記念大会特集号）および『社会学論叢・第200号』記念号発刊を迎えられたことに感謝したい。最後に、日本大学社会学科創設当時の先生方・社会学研究者の方々、これまでそして現在の日本大学社会学科教員および日本大学社会学会会員の方々、日本大学社会学研究室スタッフの方々、多くの社会学学界関係の方々へ感謝を申し上げます。